

小 学 校

大会主題 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育学習の充実」

研究主題 「生き生きとした体育学習の展開はどのようにしたらよいか」

—主体的・協働的に運動に親しむ児童の育成—

I 研究の概要

1 主題設定の理由

(1) 学校教育目標から

本校では、人間性豊かな子供の育成を目指すとともに、激動する現代社会に適応することができ、21世紀をたくましく生き抜くことができる子供を育てることを学校教育の基盤とし、その児童像として以下に掲げる三点を設定した。

①自ら学ぶ子（知） ②たくましい子（体） ③思いやりのある子（徳）

学校教育目標の達成に当たっては、教育活動全般において意欲的な態度を育成していくとともに、「教師と児童」「児童相互」の関わり合いを重視し、肯定的な人間関係を築いていくことが求められている。そして、関わり合いや肯定的な人間関係の構築を通して、自己の変容を客観的に捉え、自ら進んで体力を高めることができるようにすることが大切である。

本校の教員の年齢構成を見ると、20歳代から30歳代前半の層が多く、いわゆる中堅層が少ない構成となっている。全国的に見ても同様の傾向があり、今後も若年層が増えていくことが予想される。学校教育目標の達成に向けて、専門的知識や指導技術を継承し、よりよいものを創造していく体制を整えていく必要がある。

(2) 社会の要請から

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。

このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することをできるようにすることが求められている。

2020年からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、学校には例年になく対応が求められ続けてきた。新型コロナウイルス感染症は、令和5年5月8日付けで、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成10年法律第114号）」上の5類感染症に移行され、従来の感染症対策を一律に講じるのではなく、感染状況が落ち着いている平時においては、換気や手洗いといった日常的な対応を継続することが基本となった。それを受けて、文部科学省の「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」が改訂され、学校教育活動の継続を前提としたうえで感染拡大を防止していくため、学校において、時々の感染状況に応じた感染症対策を講じていくことが重要であると提唱されている。

また、中央教育審議会の『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）では、目指す「令和の日本型学校教育」を、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とし、それぞれの学びの一体的な充実を図ることが、文部科学省初等中等教育局教育課程課の『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』で提唱されている。

これらを踏まえながら、子供たちが学習した内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進していく必要がある。

(3) 児童の実態から

本校の児童は、体育や運動に対する意欲・関心が高く、運動や外遊びに積極的に親しむ態度が見られる。これは、本校開校以来48年にわたる体育研究の成果であると考えられる。

本校は、「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指して、「教師が課題を与え、児童を効率よく上達させる学習」から「児童が自ら課題を見付け、解決していく学習」への転換を図ってきた。近年は、新型コロナウイルス感染症への長期的な対応が求められる状況を鑑み、身体接触が少なく、児童同士の距離を確保しながら授業展開ができる「陸上運動系」を研究領域として授業研究を重ねてきた。豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手となることが期待される子供たちに「生きる力」を育むに当たって、育成を目指す資質・能力の三つの柱をバランスよく育むには、児童の主体性や児童同士の協働的な学び合いを大切にしたい体育学習を展開する必要があると考える。

以上のことから、主体的・協働的に運動に親しむ児童の育成を目指した「生き生きとした体育学習の展開」を追究することとし、本研究主題を設定した。

2 研究の目的

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることで、主体的・協働的に運動に親しむ児童の育成を目指した「生き生きとした体育学習の展開」を追究する。

本校における「生き生きとした体育学習」

- (1) 一人一人が「できた」「わかった」という力の伸びを実感し、達成感を味わうことができる学習
- (2) 自己の課題に気付き、解決の方法を選んだり、伝え方を工夫し合ったりする姿が見られる学習
- (3) 運動の楽しさや喜びを仲間と共有し、意欲的に運動に取り組む姿が見られる学習

3 研究の仮説

教師が運動の特性や児童同士の学び合いを大切にしたい学習財・学習過程の工夫をし、学習カードを有効に活用しながら児童の実態に合わせた指導・支援を行えば、児童は主体的・協働的に運動に親しみ、生き生きと活動することができるだろう。

※学習財…児童の生涯にわたり財産となる認知的、技術的内容及び社会的行動の内容を習得することができるよう教材として授業の中に取り入れているもの。

4 研究の方法

陸上運動系の単元において、「学習財（教材）の工夫」「学習過程の工夫」「学習カードの活用」の三つの手立てを講じた授業研究を、各学年2回行う。

【1・3・6学年：6・7月と10・11月 2・4・5学年：6・7月と9・10月】

そして、以下の（1）～（3）を実施・分析し、成果と課題から上記の三つの手立ての有効性について検証する。

（1）運動有能感に関する調査

4月と仮説検証対象の単元終了後の2回調査を行う。「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子とその総合計について、t検定を用いて分析する。

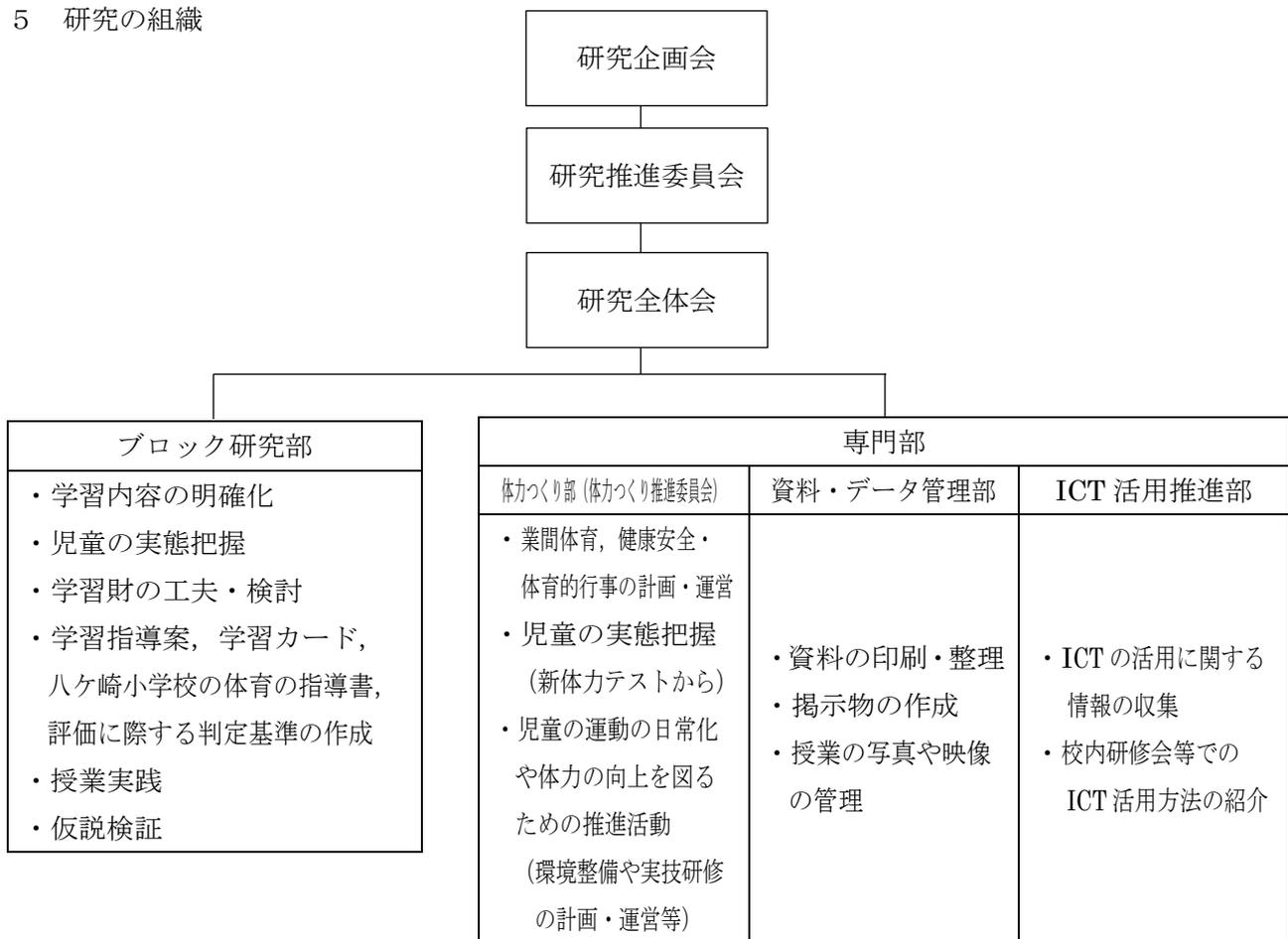
（2）形成的授業評価

仮説検証対象の単元において、授業後に毎時間実施する。児童の満足度（「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の4次元）について分析し、授業改善に役立てていく。

（3）期間記録

単元の「はじめ」「なか」「おわり」の各1時間の授業場面を、「マネジメント」「学習指導」「認知学習」「運動学習」の四つに区分して記録・分析し、授業改善に役立てていく。

5 研究の組織



職員一人一人が自分の役割を自覚し、チーム学校として一丸となって研究に取り組むことができるよう、組織形態・役割の明確化を図る。各会・部の中心に主任や部長を据え、見通しをもって共通理解を図りながら協働的に研究を進めることができるようにする。同僚性を大切にしながら、持続可能な研究体制づくりに努めている。

II 研究の実際

1 学習財（教材）について

低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・運動遊びの楽しさに触れ、走ったり跳んだり投げたりする動き自体の面白さ・心地よさを感じながら、夢中になって取り組むことができる教材。 ・運動遊びの行い方を工夫することができる教材。 ・基本的な動きを身に付けることができる教材。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・運動の楽しさや喜びに触れ、走ったり跳んだり投げたりする動き自体の面白さ・心地よさを感じながら、進んで取り組むことができる教材。 ・自己やチームの課題の解決方法・活動を工夫することができる教材。 ・基本的な動きを身に付けることができる教材。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・運動の楽しさや喜びを味わい、競走（争）での勝利や記録の達成を目指して積極的に取り組むことができる教材。 ・自己やチームの課題の解決方法・活動を工夫することができる教材。 ・合理的な運動の行い方を大切に、基本的な技能を身に付けることができる教材。

※「学習内容の明確化」と「学習意欲の喚起」の視点を踏まえながら、「運動の特性」と「児童同士の学び合い」を大切に教材づくりを行う。

例：第3学年 小型ハードル走

(1)「運動の特性」について

陸上運動系には、「競走（争）型」と「達成型」の特性があるが、「競争的運動欲求」を充足することが大切とされる中学年の発達の段階や本校児童の実態を考慮して、「競走（争）型」の特性に重点を置いた授業づくりを行う。児童の興味・関心があることを軸にして授業に取り入れることで、運動欲求が充足され、皆が楽しく意欲的に活動できるのではないかと考える。

小学校学習指導要領解説体育編では、走・跳の運動「小型ハードル走」における「知識及び技能」の指導内容の例示が、以下のように記載されている。

- ・インターバルの距離や小型ハードルの高さに応じたいろいろなリズムで小型ハードルを走り越えること
- ・一定の間隔に並べられた小型ハードルを一定のリズムで走り越えること

この二つは、小型ハードルの間隔や高さ、走り越えるリズムが異なる。そのため、2年間のまとまりを考慮して指導計画を作成するにあたり、発達の段階を踏まえた系統性を重視して第3学年と第4学年で指導内容を整理する必要があると考え、「インターバルの距離や小型ハードルの高さに応じたいろいろなリズムで小型ハードルを走り越えること」を中心に扱うこととする。



場の設定（1コース）

- ・30mの折り返し小型ハードル走（片道15m）
- ・8台の小型ハードル（片道4台）
- ・小型ハードルのインターバルの距離は、一定としない（2～5m程度）。
- ・競走（1対1，チーム対抗戦）

使用する小型ハードルは、児童の意欲を喚起し、どの児童も安全・安心に活動することで運動感

覚を養うことができるよう、「高さが異なり，走り越える感覚に違いが出ること」，「身近で手軽に準備することができること」，「接触や転倒に対する恐怖心を和らげることができること」，「軽量で児童が素材に慣れ親しんでいること」を視点を，以下の5種類とする。

授業で使用する小型ハードル

	シート	斜め段ボール	低い段ボール	ペットボトル	高い段ボール
					
高さ	0.3cm	23.1cm	23.2cm	30.5cm	31.5cm

(2) 「児童同士の学び合い」について

陸上運動系の運動は，一般的にほとんどが「個人」で完結する運動である。小型ハードル走も同様であるが，チームにおける集団的な活動として，リレー形式によるチーム対抗戦を取り入れる。学習課題の解決に向けたチームでの練習に加え，チームで協力して自分たちのコースを作ったり，そのコースで相手チームと競走したりする活動を通して，協働的な学びを保障できるようにする。

2 学習過程について

	単元前半	単元後半
ねらい	知識・技能の習得	知識・技能の活用・発揮，課題のよりよい解決
個別最適な学びの視点	◎指導の個別化を重視する。 学習課題を自分事として捉え，解決したい課題の解決に向けて試行錯誤することを通して，知識・技能を習得することができるようにする。	◎学習の個性化を重視する。 単元前半で習得した知識・技能を活用・発揮し，試行錯誤しながら自己の課題をよりよく解決できるようにする。
協働的な学びの視点	同じチームの仲間と共に，学級全体での共通課題について，その解決に向けた活動を行う。	同じ課題をもつ友達と共に，その課題の解決に向けた活動を行う。
	競走（争）や記録測定は，毎時間同じチームの仲間と共に行う。	

※「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。

※運動の特性や児童の発達の段階を考慮し，単元全体の「競走（争）や記録測定」における共に活動する対象を「ペアチーム」にすることや，単元後半の「課題解決学習」における共に活動する対象を「ペアやトリオの友達」や「同じチームの仲間」，「ペアチームの友達」等にすることも想定している。

例：第6学年 ハードル走

学習過程を工夫した指導計画（全7時間）

はじめ		なか			おわり	
1	2	3	4	5	6	7
指導の個別化					学習の個性化	
オリエンテーション	課題の発見	知識・技能の習得			知識・技能の活用・発揮，課題のよりよい解決	
共通課題の解決に向けた学習					一人一人の課題の解決に向けた学習	

学習過程		指導の工夫や留意点
はじめ	1 時間目 オリエンテーション	<p>教材との出会いを大切に、「やってみよう」「自分にもできそうだな」という思いをもって単元を始めることができるようにする。</p> <p>教師の手本映像を観て目指す姿を記述したり、教師から単元を通じた学習のねらいを聞いたりする活動を設けることで、児童が単元のゴールに向けて「なりたい姿」をイメージし、学習の見通しをもつことができるようにする。</p> <p>学習におけるルールや場づくり、教具・用具の扱い方を丁寧に指導することで、安全に学習することへの意識付けをしたり、2時間目以降の学習指導場面やマネジメント場面を減らしたりすることができるようにする。</p>
	2 時間目 課題の発見	<p>ハードル走を構成する四つの局面のうち、「アプローチ」「ハードリング」「インターバルランニング」の三つの局面から、より速くハードルを走り越えるための一番の課題を見付けられるようにする。児童が自身の動きと教師の手本映像と比較したり、仲間と見合ったりしながら見付けた一番の課題は、「インターバルランニング」が4割強で最も多く、「アプローチ」が4割弱、「ハードリング」が約2割であった。</p> <p>記録測定のルールについて説明・確認し、初めての記録測定を行う。役割分担を明確にし、その役割を一人一人が果たすことで、単元が進むにつれて徐々に短時間での記録測定が行えるようにする。</p>
なか	3～5 時間目 知識・技能の習得	<p>観察や学習カードから把握した児童の思いや気付き、困り感を基にして学習課題（共通課題）を設定する。そのため、指導計画とは異なる学習課題・練習方法になることも想定されるが、児童の主体的な学びを重視し、柔軟な設定・提供をするようにする。そうすることで、児童が学習課題を自分事として捉え、解決したい課題の解決に向けて試行錯誤し、知識・技能を習得することができるのではないかと考える。</p> <p>2時間目に最も多くの児童が一番の課題として挙げていた「インターバルランニング」から学習することとした。ハードルをリズムカルに走り越えるための知識・技能を習得するために、各局面における課題の解決に向けて、共通課題でチームの仲間と共に皆が同じ練習を行い、運動のポイントや学び方、練習方法などを理解することができるようにする。</p>
おわり	6, 7 時間目 知識・技能の活用・発揮 課題のよりよい解決	<p>単元前半で習得した知識・技能を活用・発揮しながら試行錯誤することを通して、課題をよりよく解決できるようにする。チームではなく、同じ課題をもつ友達と活動することで、動きを見合い伝え合う際も、自分事として学習に取り組み、一人一人が自分の課題をよりよく解決することができるようにする。</p> <p>単元の最後の時間（7時間目）では、「ハードル走」の学習を通して、「分かったこと」や「できるようになったこと」を個人やチーム、全体で振り返ることで、肯定的に単元を終えることや次の単元につなげることができるようにする。</p>

3 学習カードについて

共通
<ul style="list-style-type: none"> ●児童が記述したものに、必ずコメントを返す（称賛＋発問や助言）。 ○課題確認の際に、前時の自分の記述と教師のコメントを読み、本時の学習に対して見通しをもつことができるようにする。 ●よく書けている学習カードを授業の始めに紹介する。 ●学習カードから把握した児童の思いや気付き、困り感を基に、意図的に関わり働きかけることで、児童の理解が深まるようにする。 ○振り返りの際に、以下の手順で学びの思考を整理するようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ①本時の学習を振り返り、簡単な選択式の設問に回答する（3段階）。 ②回答したことを基に、一人一人やチームの成果・課題について話し合う。 ③話し合ったことを踏まえ、個人の成果・課題について記述する。 ●前時に学習した内容（運動のポイント等）を記載することで、児童の思考の手助けとなるようにする。 ●図やイラスト、写真、吹き出し等を使い、児童のつまずきや運動のポイントを視覚的に理解することができるようにする。 ●本時の学習について簡単に振り返られるよう、選択式の問い（三つ程度）を立てる。 ●「今日の授業を振り返ってみましょう。」ではなく、「着地でお尻や手を後ろに着かないようにするために、あなたはどうしましたか。」というように、発達の段階に応じた具体的な問いを立て、本時のめあてに対する成果や課題（学びの過程）を振り返ることができるようにする。 ●記述時間は、3～5分間程度設けるようにする。
低学年
<ul style="list-style-type: none"> ●記述できず困っている児童には、個別にインタビューを行うことで、話すことによる学習の振り返りができるようにする。 ●本時のめあてに対する記述をする欄の近くに、学習した動きのポイントを「お助け言葉」として記載することで、思考や記述の手助けとなるようにする。 ●上手な友達を見付け、その動きのよさを記述する問いを立てることで、動きを見る視点や動きの幅を広げることができるようにする。
中学年
<ul style="list-style-type: none"> ●本時のめあてに対する記述をする欄の近くに、学習した動きのポイントを「お助け言葉」として記載することで、思考や記述の手助けとなるようにする。 ●上手な友達を見付け、その動きのよさを記述する問いを立てることで、動きを見る視点や動きの幅を広げることができるようにする。 ●毎時間の競走（争）や記録測定の結果やその得点を記入する欄を設けることで、学習の成果を振り返り、成就感を味わうことができるようにする。
高学年
<ul style="list-style-type: none"> ●毎時間の記録測定の結果やその得点を記入する欄を設けることで、学習の成果を振り返り、成就感を味わうことができるようにする。 ●助走の距離や歩数（走り幅跳び）、インターバルの距離（ハードル走）等を毎時間記入する欄を設けることで、試行錯誤を通してより自分に合ったものを決定することができるようにする。

※●：教師の活用 ○：児童の活用

例：第1学年 走の運動遊び

学習過程		指導の工夫や留意点
はじめ	1 時間目 オリエンテーション	教材との出会いである1時間目を肯定的に終わることができるよう、「楽しかったこと」や「うまくできたこと」についてを中心に振り返ることができるようにする。
	2 時間目 課題の発見	三つのコースの中から「もっと楽しみたいコース」を一つ選択し、その理由を記述することで、自己に適した課題について、学びの思考を整理することができるようにする。教師は、観察や学習カードから見取った児童の思いや気付き、困り感を基に、単元の「なか」での課題設定を行う。
なか	3～5 時間目 知識・技能の習得	「まっすぐコース」「くねくねコース」「ジグザグコース」のそれぞれのコースを速く走るためのコツやポイントを見付け、授業で学習したことやお助け言葉を基に記述することで、走動作についての知識が習得できるようにする。
おわり	6, 7 時間目 知識・技能の活用・発揮、 課題のよりよい解決	自己の課題のよりよい解決に向けて「もっと楽しみたいコース」を一つ選択し、選んだ理由や速く走るために気を付けたことについて記述することで、学びの思考を整理することができるようにする。 単元の最後の時間（7時間目）では、「走・跳の運動遊び」の学習を通して、できるようになったことを記述することで、肯定的に単元を終えることや次の単元につなげることができるようにする。

本時の学習課題

思考を促す写真やイラスト、吹き出し

学習の振り返り
(記録、成果や課題)

教師のコメント
(称賛+発問や助言)

そのうんどうあそび
かくしゆうカード (四14じがぬめ) 6がつ22にち(6日)

1.ぬめ 3.くみ ぬめえ

じくざくこおすを はやくはしるために たいせつなことは なんだろうか。

じくざく こおす

せんせい はしった
「まっすぐこおす」と
どんなところが おおきく
どんなところが つかいやすか?

★ きょうの じゆぎょうを かりかえろう (◎ ○ △)
ともだちと たのしくあそぶことが できましたか。
じゆんひやうがつけを すずんでやることは
できましたか。
じくざくこおすを はやくはしるために
たいせつなことを みつけることが できましたか。

★ じくざくこおすを はやくはしるために あなたはどう
しましたか。

〈おたすけ ことば〉
まっすぐ まがる はやく ゆっくり

〔せんせいから〕

☆ じくざくこおすを はやくはしるために あなたはどう
しましたか。

はやくはしって ちよつおそ
くたから1になれました。

〈おたすけ ことば〉
まっすぐ まがる (はやく) (ゆっくり)

〔せんせいから〕
「いいなれて、すこからにね!
そうだね! じくざくこおすを はやくはしるためには、
○○○のときは、はやくはして、
○○○ときは、ちよつおそく 1になね!

「授業で使用した学習カード」と「児童の記述・教師のコメント」例（4時間目）



学習カードを活用した学びのサイクル

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

(1) 学習財（教材）

- ・運動有能感の「身体的有能さ」と「統制感」の数値が向上した。また、単元の1時間目における形成的授業評価の「成果」次元の数値がある程度高く、「主体的な学び」の実現に向けて重要になる、教材とのよい出会いができたのではないかと考えられる。そして、単元を通して、形成的授業評価の「意欲・関心」次元の数値が高かった。

→「運動の特性」を大切にしながら、多様な遊び場の設定や一人一人の目標記録の設定と得点化、恐怖心の緩和等の工夫をし、児童が楽しさや喜びを得ることができる魅力的な教材を提供することができた。

- ・運動有能感の「受容感」の数値が向上した。また、単元を通して、形成的授業評価の「協力」次元の数値が高かった。

→「児童同士の学び合い」を大切にし、競走(争)・目標達成の仕方や学習集団を工夫したことで、チームの仲間や同じ課題をもつ友達等と共に、協働的に学習することができた。また、見合い伝え合う視点を明確にしたり、児童の気付きを基に作成した技能に関するチェックシートを活用したりすることも有効であったと考えられる。

(2) 学習過程

- ・形成的授業評価の「学び方」次元の数値が、単元が進むにつれて概ね上昇傾向であった。

→単元前半に「指導の個別化」、単元後半に「学習の個性化」の考え方に基づいた段階を踏んだ指導計画が、児童にとって学びやすく、一人一人が課題意識をもちながら主体的に学習することができたのではないかと考えられる。教師は、指導計画における各時間の位置付けを明確にしながら授業を展開することができた。

- ・単元が進むにつれて、運動学習場面が向上した。

→単元の1時間目に、場づくりや用具の準備・片付けの仕方、活動中の安全面などについての説明・確認を丁寧に行ったことで、学習指導場面やマネジメント場面を減少させることができた。また、授業後の振り返りを毎回行い、マネジメントを意識した授業準備や授業改善をすることもできた。

(3) 学習カード

- ・児童の実態を把握し、個やチームへの指導・支援に生かすことができた。

→授業中の観察や授業後の形成的授業評価に加え、学習カードから児童一人一人の実態を見取り、どの児童・チームに対して、どのような言葉をどのタイミングでかけるか等を事前に計画したうえで授業に臨むことができた。

- ・学習の振り返りを「質的に」「具体的に」「理由を付けて」記述することができる児童が増え、見方・考え方の高まりが感じられた。

→児童の発言や学習カードへの記述を基にしながら、前時の振り返りを行ったり、掲示資料を作成して共有したりすることで、児童一人一人の知識を深めることができた。また、児童の記述に対して毎時間コメントを書いたり、授業の始めによい記述を全体に紹介したり、授業内に児童への具体的な肯定的・矯正的フィードバックを積極的に行ったりしたことも、記述内容の向上につながったのではないかと考えられる。

2 課題

(1) 学習財（教材）

- ・運動有能感の「身体的有能さの認知」と「統制感」の数値が低下したり，形成的授業評価の「成果」次元の数値が停滞したりしてしまう実践があった。
→児童が自身の動きや技能の高まりを自覚できるよう，「できたこと」や「伸びたこと」が明確に分かる教材を提供し，児童同士でその事実や称賛・アドバイスの言葉を伝え合いながら学習することができるようにする。教師による積極的な相互作用も重要になる。また，身に付けさせたい動きや技能を明確にしたシンプルな教材や課題解決に向けたよりよい練習方法，児童の実態に合わせた適切な目標設定，記録測定での試技数等についても検討する必要もある。
- ・ICTを有効に活用することが，あまりできなかった。
→「目的」ではなく「手段」であるという視点をもちながら，動画の撮影方法や確認方法，活用場面などを検討するとともに，他領域や他の教科等でも日常的に活用していく必要がある。

(2) 学習過程

- ・単元前半での「知識・技能の習得」がしっかりとされず，単元後半での自己の課題に合わせた学習の効果が不十分になってしまうことがあった。
→指導内容の理解や児童の実態把握をしっかりとしたうえで指導言語を厳選し，具体的な肯定的・矯正的フィードバックを積極的に行うことで，各時間の指導内容が押さえられるようにする。また，前時で習得が不十分であった知識・技能については，必要に応じて次時にウォーミングアップで取り入れたり，課題確認の際に丁寧に振り返ったりすることで定着を図ることができるようにする。そして，試行錯誤しながら十分に課題解決に取り組めるよう，教師が話す内容を精選したり，駆け足で移動する児童を称賛しよい行動を広めたりすることで，学習指導場面やマネジメント場面を減らし，運動学習場面をより確保できるようにする。
- ・記録を伸ばせなかったり，競走（争）に負けてしまったりした児童や，授業への満足度が低い児童への指導・支援がもっと必要であった。
→動き・技能の高まりや知識の深まり，取り組む姿勢への価値付けを行ったうえで，その児童とともに原因や改善策をはっきりとさせ，解決に向けた見通しをもって次時の学習に取り組むことができるようにする。事前に具体的な指導・支援の計画を立て，授業の中で意図的にその児童へ多く働きかけるようにする。

(3) 学習カード

- ・学習カードを書く時間が多くかかってしまうことがあった。
→運動学習場面を確保する視点をもちながら，発達の段階や児童の実態，指導内容，評価規準などに応じて，選択式と記述式を使い分けたり，記述時間を増減させたりするなどの工夫が必要である。
- ・抽象的な記述や問いに正対していない記述で，児童の実態を十分に見取れないことがあった。
→児童が詳しく具体的に記述できるようにするために，学習カードの作成の際に具体的な問いを立て，記述の際に助言や思考を促す発問をする必要がある。また，問いに正対して答えることや詳しく具体的な文章を書くことに関しては，他領域での学習においても指導していくことに加え，他教科等においても教科横断的に指導していく必要がある。そして，知識の習得に加え，学びの過程を見取ることができるような問いや指導・支援の工夫についても検討していく。